



子育てのやりにくさから考える

園長 野中 泉

先日、熊取町のある会議でこんな話を聞きました。町の1歳7か月検診で我が子の育てにくさを訴える母親は年々増加しており、昨年度の集計では全体の40%を超える母親から、発達への気がりや我が子へのやりにくさの訴えがあったというのです。衝撃的な数字だと思いました。

1歳7か月といえば、いわゆるイヤイヤ期の入り口。「そんなもん、みんな なんでもかんでも、イヤイヤいうねん。」と私たちが笑い飛ばしてきたその時期の子どもへの感覚と、「いま」は、ずいぶん違うのでしょうか。

目があいにくい・理由なく泣き続ける・呼んでも振り向かない・落ち着かなく動き回る。夜寝てくれない・偏食が著しく激しい、この中でいくつか当てはまったらその子は「発達障害です」と、乱暴に決めつけるネットの情報も不安を煽るひとつですよ。実際、私のところに我が子のやりにくさを相談に来るお母さんたちの中にも、「ネットで調べると、自閉症の症状にすべて当てはまるんです」と、自分勝手に診断を下してしまっている人が時々います。でも以前勤めていた障害児施設も含め知的障害、自閉症の子どもたちを何人も見てきた私からすると、目の前の子は決してそうは見えないということがほとんどです。

もちろん、専門的な視点も含めて「その子の苦手なこと、困り感」が明らかになることは、とても大事なことです。たとえば、触覚過敏 聴覚過敏の子。情報の整理ができない子。予定の変更にパニックになる子などの、それぞれの特性を知ることが、その子の苦しさを理解できることにつながり、どんな助けがあったら、その子らしく安心して暮らせるかを、周囲の大人たちが考える手立てとなるからです。

でも、だからこそ、ネットや本だけの情報で「自閉症かもしれない」と疑い、怖くて誰にも相談できなかつたとポロポロと泣くお母さんを見るたび、「ふつう」と違うこと、「ふつう」からはみ出してしまうことを極端に怖がらないといけない今の社会全体の許容の狭さと、近い友人には、深い苦しみは打ち明けられない孤独な子育てに胸が痛くなるのです。

もうひとつ。このところ、子どもを「叱らない」親たちが増えているということも、いろいろな場所で話題になります。そういえば、アトムの懇談会でも、叱らない（叱れない？）というワードを聞くことがしばしばあります。「できるだけ共感してあげたい」「否定的な言葉を聞かせたくない」「友達みたいな親子でいたい」と理由は様々です。もちろん、私も、頭ごなしに叱りつけたり、恐怖で支配するような子育ては決して良いと思いません。でも、そんなお母さんたちが、続けて「ごはん中、走り回って止められません」とか「気に入らないことがあると、私をぶったり、噛んだりしてやめてくれないんです」と、ほとんど困っている様子を見ると、「それは、怒ってもいいのでは？」と首をかしげたくもなります。

「ほんとうは、遊ばず食べてほしい」「ほんとうは、ぶたないでほしい」と我が子に思っているのに、もっと意地悪な言い方をすれば「子どもを自分の思うように育てたい」とさえ思っているのに、その気持ちを隠して（ちゃんと、向き合わず）、良いお母さん、やさしいお母さん像に振り回されているとしたら、それはそれで、ずいぶんと苦しいことだとも思うからです。

残念ながら、子育てに魔法のスキルなんて存在しません。ただ、目の前の子どもと試行錯誤しながら、ひとりの大人として、真剣に子どもと向き合いながら、いつの間にか子どもも育ち、同時に私たち親も育てられていくのだと感じています。

当たり前のことですが、保育園には、いろんな子がいます。そして、いろんな大人がいます。「いろんな子がいるんやな」と知る。いろんな大人がいるんだなとわかること。悩んでいるのは、うちだけじゃないんだなと気づくこと。立派な親じゃなくてもいいんだなと思えること。なんにせよ、そこがはじめの一步となるといいなと、願う毎日です。